

ルポの書：「大いなる看取り」を読んで

新聞書評の「施設を開設した夫妻が『最後に与えられた時間に、それぞれの人がその人らしく生き直す【座】を獲得するお手伝い』という哲学をもって、運営している場所」が目にとまり、「大いなる看取り～山谷のホスピスで生きる人びと～」を購読した。

その場所とは、在宅ホスピスケア対応型集合住宅で、がんに限らず重い病に侵され病院や福祉事務所等から紹介された、色んな事情から家族から疎遠、絶縁の孤老の入居者がスタッフと共に過ごす場である。

制度的な在宅ホスピスケア施設でないために、入居者の生活保護費からの一部負担金と一般からの寄付で運営。

著者は新聞記者で、この場に足繁く通い、入居者、スタッフとの日常的な会話、交流を淡々と記したルポの書であった。

淡々とした記述だけに、入居者、スタッフそれぞれの人生が浮かび上がり、正に「事実が小説より奇なり！」の人生ドラマの数々…。

設立した夫妻の理念からか、ここには施設利用上の約束事は殆どなく、また、ケアする人とされる人の垣根は限りなく低く、「むしろ積極的に誰かと仲良くなっている。そのことから生まれる交流が、行き場がなく、人生の終章でドヤ街のホスピスに漂流した人たちの心を和らげている。」ようで、人生の終章でのその交流の様子も淡々と記されていた。

例えば、喉頭がんで永久気管孔、遺漏のある入居者が、死ぬ前にもう一度故郷を見たいと願い、帰郷に付き添ってくれる親しいスタッフの看護師と二人でパチンコで航空チケット代を稼ぎ実現するエピソード、等々。

著者は、出会ったあるドイツ人の言葉「死に直面した人にとって、疼痛緩和ケアなどの『doing』だけでなく『being』、心温まる人が共にいることがとても大切なのです。」を紹介している。

また、高齢化社会が益々進むと、「家族ではなく他人に看取られる時代をちょっとだけ先取りしている施設と言えるだろう。その意味では、この小さなホスピスは特殊な存在ではなく、普遍性を帯びている。ここで得られる『経験』は恐らく、多くの場で活かせるであろう」と記している。

このNPOのHP (<http://www.kibounoie.info/>) には、入居者の日常の写真はいうに及ばず、スタッフ、ボランティアの顔写真付きの自己紹介もあり、「心温まる人が共にいること」を大事に考えていることがHPからも推測され、何か清々しさを感じた。